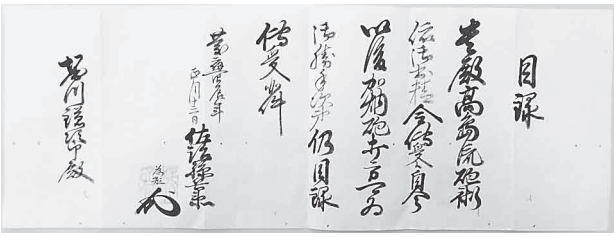
新潟県立 文書館だより 第24号 平成28年3月30日

越後佐渡おもしろ歴史ばなし

虫歯のため欠席します　―西洋軍備導入と領民―

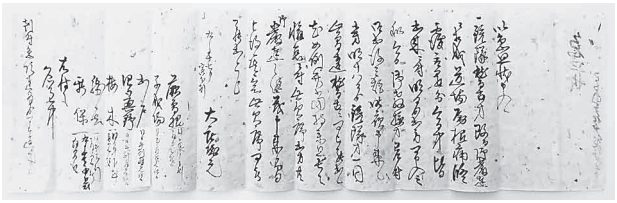
天保12年（1841）、清国（当時の中国）とイギリスが対決しているアヘン戦争（1840～1842）の情報を得た江戸幕府は、強大な軍事力を持つ欧米列強によるアジア植民地化の動きが日本周辺に迫ってきたことに危機感をもち、とりあえずの対応策として長崎から江戸に西洋砲術家を呼びました。長崎奉行所鉄砲方役人の高島秋帆です。彼は5月、江戸郊外の徳丸原（現東京都板橋区）で大砲術演習を行いますが、放たれた西洋の製造技術で製造された大砲の轟音に、集まった江戸の人々は胆をつぶし逃げ出したといいます。その驚きの有様は、演習の行われた徳丸原がそれ以来、高島様の平野、「高島平」という名前になってしまったことからもうかがいしれます。



「目録（高島流砲術御出精加火内砲御勝手次第）」E 9916 － 1663

江戸時代を通して受け継がれてきた和流砲術は、個人の銃砲を撃つ技量をいかに磨き上げるかという、いわば武芸としてのものでした。しかし江戸郊外での大砲術演習以降、個人の技量よりも集団としていかに効率よく銃砲を活用していくかを目的とする西洋流砲術の導入が、次第に諸藩へも拡がっていきます。

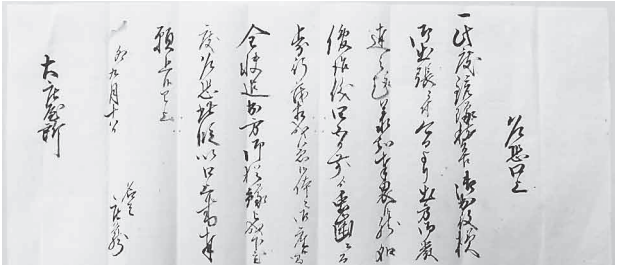
新発田藩ではペリー来航直前の嘉永4年（1851）に始まりました。この年、和流砲術の師範であった新発田藩士佐治孫兵衛らは、江戸の西洋流砲術の修行に行き、嘉永6年（1853）免許皆伝となって帰藩し砲術の指導に当たっていきます。当館には、免許皆伝の佐治孫兵衛が砲術指導をした目録が所蔵されており、時代の移り変わりが越後にも及んできた一端を見ることができます。



「急廻状（明日より銃隊稽古につき厳達）」E 9103 － 80 － 46

幕末における新発田藩の軍備強化は西洋砲術導入から始まり、海防の急務に備えるため、領民を兵員として取り立てるようになっていきます。元治元年（1864）、村役人やその子弟からなる部隊が誕生します。「銃隊組」の名で後に戊辰戦争にも参加し活躍するこの部隊は、佐治孫兵衛がその指導にあたりました。

銃隊組の育成・強化が順調であったかというと、当館所蔵の中蒲原郡新津組大庄屋桂家文書（E9103）をみるとそうとはいえないようです。慶応3年（1867）9月17日に領主から出された通達の廻状には、「明日、銃隊稽古が行われるので間違いなく出席すること」「久しぶりなので欠席のないように」といった内容がわざわざ書かれています。一方で、領民からは翌9月18日に「4、5日前から虫歯のため歩くこともできないから、全快するまで稽古は休ませてください」という欠席届が出されます。他にも、「稲刈りにて手首負傷」「両足怪我につき」などの理由による欠席届もあり、欠席を願い出る者があとを絶たなかったことがうかがえます。



「虫歯欠席届」E 9103 － 80 － 47

江戸時代は、戦うことは武士の役目であって、武士以外の者が軍事訓練を受けることは大きな変化でした。彼らにとってその負担は決して軽くはなかったでしょう。これらの文書からは、時代の変化に対する領民の戸惑いと、領主に対するささやかな抵抗が透けて見えるような気がします。

新潟県立文書館ホームページに新潟県の歴史ばなしが「越後佐渡ヒストリア」として連載中です。ぜひご覧ください。

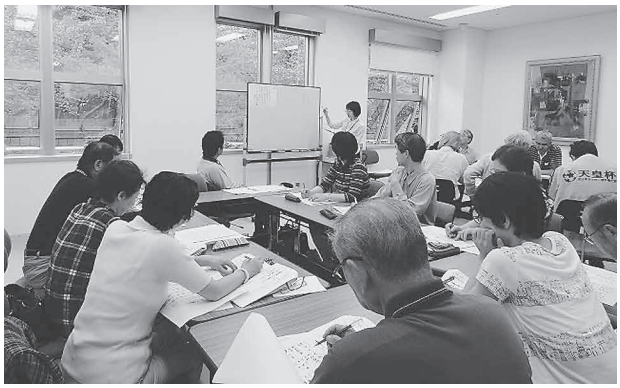
抄録　文書館主催講座

新潟県立文書館では、平成 27 年度も古文書講座と「新潟県の歴史」講座を開催し、多くの方々から御参加、御好評をいただきました。その一部を御紹介します。

はじめての古文書講座

所蔵資料を教材に「古文書講座」を、「はじめて」・「初級」・「解読」の 3 つのグレードで実施しています。その中で、文字通りはじめて古文書解読に取り組もうという人を対象にした講座が「はじめての古文書講座」です。

「はじめての古文書解読」は、年 2 回（平成 27 年度は春季・冬季）、3 回連続の講座として実施しています。一人一人が原本にふれる機会をもうけてあります。古文書を手にとって触れながら学んでいきます。定員が 15 名と少人数ですし、講師の他に文書館職員が複数サポートにあたりますので、疑問などもすぐに解決することができます。



はじめての古文書講座の様子

内容は、年号や干支などの古文書の基礎知識や、「～候（そうろう）」や「如件（くだんのごとし）」などのよく使われる表現を学び、最後には古文書 1 枚を解読していきます。受講者の感想の一部を紹介します。

☆「昔の時代の雑談のようなものも聞くことができて、とても楽しかったです。」

☆「古文書を読みこなす力がこの年齢で得られるものなのかを知りたいと思い受講しましたが、『なんとかなりそう』との感触を得ることができました。ありがとうございました。」

文書館教養講座

「新潟県の歴史講座」には、県内外の研究者を講師とする「歴史講座」と、文書館職員の講師による「教養講座」があります。平成 27 年度の「教養講座」は、以下のラインナップで実施しました。

講座回	タイトル
第 1 回	中世世界の萌芽－その時越後で何が起こっていたのか－
第 2 回	幕末越後の実像に迫る－欠席届を斬る－
第 3 回	系図に隠された歴史－長岡藩主の家譜から見えてきたこと－
第 4 回	郷土研究の先哲－蔵書から探る研究の足跡－
第 5 回	県境こぼれ話－新潟県の不思議な県境－
第 6 回	新潟県懐かしのローカル鉄道

時代も 11 世紀～ 20 世紀（平安後期～戦後）までと様々ですし、内容も多種多様で、新潟県の知られざるエピソードが満載となっています。講座終了後に、参加された皆さんはきっと誰かに話したくなったのではないでしょうか。

参加者の感想の一部を紹介します。

☆「銃隊組の欠席届より、当時の社会背景が知れて、面白かったです。」（第 2 回）

☆「新潟県地方鉄道のエピソードを面白い切り口で説明されており楽しめました。」（第 6 回）

平成 28 年度の教養講座は、参加者の皆さんからのもっと長く聴きたいという声にお応えして、これまでの 60 分の講座を、90 分に変更して開催します。

平成 28 年度の新潟県立文書館主催講座は、この「文書館だより」の最終ページに記載されています。まだ、参加されたことがない方も、ぜひ御参加ください。多くの皆様の御参加をお待ちしております。

文書館小辞典

～知識編～

Q：いつ、どのように現在の「新潟県」になったのですか？

新政府が成立すると、越後・佐渡は、11の藩と政府直轄の1府（越後府）と2県（柏崎県･佐渡県）に分けられました。その後、越後府は新潟府、そして水原県と名前を変え、明治3年（1870）3月に新潟県になりました。

明治4年（1871）7月廃藩置県により、越後・佐渡は13の県に分けられました。その後、県の統合が進み、同年11月には新潟県、柏崎県と、佐渡県から名前を変えた相川県の3つにまとめられました。明治6年（1873）6月に柏崎県が、明治9年（1876）4月に相川県が新潟県に編入され、明治19年（1886）5月には東蒲原郡（旧会津藩領、当時福島県）が加わって現在の新潟県の姿になりました。このときの人口は約163万人で、全国1位でした。

～保存編～

Q：フィルムで撮影した写真はどのように保存したらいいのでしょう？

「文書・資料」というと古い昔の事を記したもの、と思われがちですが、今を記録しているものはすべて将来において「昔を知る文書･資料」となります。その時々を撮影した写真は映像で振り返ることができる大切な資料であると言えます。

デジタル写真全盛の現代ですが、ネガフィルムで撮影した写真はどのように保存したらいいでしょうか？

ポイントは、“湿度”と“光”です。プリント写真はアルバムに、ネガフィルムはフィルムシートに収めることにより、ホコリ・カビ等から保護できます。直射日光が当たらない、風通しのよい場所に保管して下さい。プリント写真やネガフィルムは比較的きれい状態で残っていれば、デジタル変換することも可能です。普段からカビやにおい（酢酸臭）に注意してください。

文書館の書棚

アーカイブズが社会を変える
公文書管理法と情報革命
松岡資明 著
平凡社新書　2011年4月

アーカイブズという語を目にすることが増えた。デジタルデータや映像の分野に多い感があるが、元来はこの関係の用語ではない。端的な訳語がないのだが、「公文書を含めた多種多様な分野の記録資料、さらにそれらを収納する施設」と著者は説明している。これに「永久に保存」という属性が加われば完璧である。

日本のアーカイブズは､記録資料の多さに比らべ、文書館・公文書館を名のる施設が決して多くない。新潟県立文書館もアーカイブズの一つである。諸外国と比較すると、日本のアーカイブズ分野は本当に遅れている。

この本は「公文書管理法」がスタートするタイミングで､2011年4月に出版された｡初版の帯には｢“記録”を蔑ろにしてきた日本人。これからは､『文書不存在』では済まされない｡｣の文字が並ぶ。著者は日本経済新聞編集委員を務めた人物で、国内のアーカイブズ関連の取材経験からこの本を書き下ろしている。幅広く日本のアーカイブズについて書かれていて、問題や課題の指摘も鋭い。出版から5年を経ているが全く色褪せていない。アーカイブズについての手軽な本が数少ない中で白眉な存在である。「文書館だより」を手にした皆さん、ぜひ一読をお薦めします。【中川記】

平成28年度文書館主催講座

◎古文書講座

講座名	日　程	定員	会　場
はじめての古文書講座（春季）	4/14(木) 4/21(木) 4/28(木)	15	共同研修室１・２
古文書初級解読講座（春季）	Aコース 5/31(火) 6/ 7(火)	50	どちらも大研修室 ※A・Bコースとも同内容
	Bコース 6/ 2(木) 6/ 9(木)	50	
古文書解読講座（夏季）	6/24(金) 7/ 1(金)	180	ホール
はじめての古文書講座（冬季）	12/ 1(木) 12/ 8(木) 12/15(木)	15	共同研修室１・２
古文書初級解読講座（冬季）	Aコース 1/18(水) 1/25(水)	50	どちらも大研修室 ※A・Bコースとも同内容
	Bコース 1/20(金) 1/27(木)	50	
古文書解読講座（冬季）	2/17(金) 2/14(金)	180	ホール

※時間はすべて 13：30 ～ 15：30
※古文書講座は受講無料ですが、資料代が 100 円必要です。

◎「新潟県の歴史」講座

	講座回	日　程	定員	会　場
歴史講座	第１回	7 / 2 (土)	180	ホール
	第２回	11/26(土)	180	ホール
	第３回	3 /11(土)	180	ホール

※時間はすべて 13：30 ～ 15：30
※受講無料

	講座回	日　程	時間	定員	会　場
教養講座	第１回	7 /13(水)	90	180	ホール
	第２回	8 /4(木)	90	180	ホール
	第３回	9 /14(水)	90	180	ホール
	第４回	9 /28(水)	90	180	ホール
	第５回	10/12(水)	90	180	ホール
	第６回	10/27(木)	90	180	ホール
	第７回	11/2(水)	60	60	大研修室
	第８回	11/9(水)	60	60	大研修室

※開始時刻はすべて 13：30
※受講無料

※予定ですので変更することがあります。
詳細はＨＰまたは各回のチラシにて御確認ください。

文書館職員（アーキビスト）随想

『新潟県史』によると、新潟県内に遺っている文書数は推定値で約 500 万件にのぼる。新潟県史編さん事業での調査と文書館の調査実績と文書館所蔵文書数を合算すると 50 万件程度になるのだろうか。私たちが知っているのは全体の 1/10 程度、県内にはまだまだ膨大な数の文書が埋もれているということになる。▶地域に遺されている文書の多くは、その地域の日常の記録である。書状、金銭の出納や貸借に関わる証書や台帳、物品の書き上げ等である。そこに記された人の名前、肩書、地名、用語の全てがその地域の生きた記録である。そしてこれらを読み解き、紡ぎ合わせることで、地域の生活が歴史として語られるようになる。埋もれている文書も多くは同様のものだろう。埋もれた文書が大量にあることは、語られていない歴史があるということである。▶文書は単独では決して雄弁ではない。チームスポーツのごとく、その組み合わせにより、可能性が広がっていく。チームの魅力や可能性は選手により左右する。文書館職員は選手を発掘するスカウト役のようなものかもしれない。ならばチームやコーチ役、サポーター役は誰になるのだろうか。▶「保存なくして活用なし」、文書館はこの方針で県内の文書の保存を進めている。これからも変わらないだろう。一方で、文書館職員は「発掘した文書をどのように活かすか」を考えなければならない、そのように思うことが増えた今日この頃である。

【中川記】

編集・発行　新潟県立文書館
〒950-8602　新潟市中央区女池南３－１－２
TEL.025-284-6011　FAX.025-284-8737
URL.http://www.archives.pref.niigata.jp/
E-mail. archives@mail.pref-lib.niigata.niigata.jp